

enivré de vin

江苏工业学院图书馆 藏书章

少し酔って

enivré de vin

森瑤子

vodka

you can easily get drunk if you drink enough vodka
and even the palest of men will turn red if he drinks enough
in fact you can get drunk on vodka if you drink enough

bourbon

it is the best way to drink
the best way to drink
the best way to drink

bourbon is the best way to drink
the best way to drink
the best way to drink

bourbon is the best way to drink
the best way to drink
the best way to drink

scotch whiskey

scotch whiskey is the best way to drink
the best way to drink
the best way to drink

sherry



sherry is the best way to drink
the best way to drink
the best way to drink

champagne cocktail



port wine

port wine is the best way to drink
the best way to drink
the best way to drink

100% Vodka
100% Bourbon
100% Scotch Whisky
100% Sherry
100% Champagne
100% Port Wine

100% Vodka
100% Bourbon
100% Scotch Whisky
100% Sherry
100% Champagne
100% Port Wine

100% Vodka
100% Bourbon
100% Scotch Whisky
100% Sherry
100% Champagne
100% Port Wine

100% Vodka
100% Bourbon
100% Scotch Whisky
100% Sherry
100% Champagne
100% Port Wine

100% Vodka
100% Bourbon
100% Scotch Whisky
100% Sherry
100% Champagne
100% Port Wine

少し酔って

著者／森 瑤子

＊

初版第1刷／1990年5月1日

発行者／増田義和

発行所／株式会社実業之日本社

東京都中央区銀座1-3-9／振替東京1-326

郵便番号104 電話 03(562)2051〔編集〕(535)4441〔販売〕

＊

印刷所／大日本印刷

製本所／共文堂

＊

©Y.MORI, Printed in Japan 1990

落丁本，乱丁本は小社でお取りかえいたします

ISBN 4-408-53124-3

少し酔つて*目次

ウオツカ	5
バーボン	29
スコッチ・ウイスキー	51
シエリー	71
シャンパン・カクテル	91
カンパリ	113
ポートワイン	135
ヒレ酒	157
ガビ・デ・ガビ	185
ブランデー	209

装帧／龜海昌次

少し酔って

ウ
オ
ツ
カ

一陣の風が彼を襲った。埃とガソリンと濡れた落葉の匂いを含んでいた。

風は何かとてつもなく大きな布のように、ふんわりと彼を包みこんだ。すると晩秋の気配が一段と濃くなるような気がした。

高見は、ズボンを脚にまわりつかせながら、風に押し流されるように横断歩道を渡った。道路の反対側には、風はなかった。特に高いビルの谷間にだけ吹く風なのだろうと、彼は思った。

どこかで落葉を焚くような匂いが漂っている。もつともビル街で焚火などしているはずもないので、錯覚なのだろう。枯葉に風、そして晩秋とくれば焚火と続く連想ゲーム……。連想の突端に、妻の姿が浮かび上がる。キッチンの流し台にもたれて、何も見ていない虚ろな眼で窓の外を眺めながら、ウォツカを啜っている姿が。

高見は一瞬歩みを止め、救いを求めるようにあたりを見回した。公衆電話のボックスが、温かそうな明りを、歩道の上に落している。彼はその中に滑り込むと、何かを考える前にダイヤルを回し始めた。

「もしもし？」と相手が出た。声を確かめてから、高見は名を言った。

「あら、珍しい」と多加子が皮肉な声で言った。「すっかり忘れられたのかと、あきらめかけていたのよ」

「そんなに逢っていないわけじゃないだろう」

流し台にもたれかかっている妻の姿が、^{まぶた}瞼の中で点滅した。もたれかかるというよりは、流し台で辛うじて自分自身を支えているという感じがその姿からは露呈していた。

電話の相手が何か言っていた。高見は、実際妻がキッチンでウォツカを飲んでいる現場を目撃したわけではなかった。そうだろうと思うだけだ。そういう妻の姿をくりかえし頭に描いたために、現実との区別がつかなくなっているのだ。しかし彼女がウォツカを飲んでいることだけは確かだった。

「もしもし？」と多加子の声が出た。「聞いているの？」

まだ七時にもなっていないというのに、彼女は夜の声で喋る。^{しゃべ}

「もちろん、聞いている」

「じゃ八時でいいのね？」

「いいよ、八時で」

「食事、して来ないでね」

多加子の声に甘さが混じる。

「いや、食事はいいよ。長居はしないつもりだから」

ふと相手が黙った。

「じゃ何しに来るのよ？」それから「バカね」と言い、フフフツと笑った。

高見は多加子の部屋の様子を想像し、ソファの上で大きな猫のように寛いでいる彼女の姿を思い描いた。彼は彼女の小さいけれど居心地の良いマンションが好きだった。そこで彼女とするあらゆる事が好きだった。会話、食事、愛を交わすこと。趣味も感性も、匂いも肌ざわりも。とりわけ彼女の自立心。彼女だけのものである何かに他人が入りこむことを許さない毅然としたところ。その対局に——妻がいた。高見の肉体の奥深くで、鋭く疼くものがあつた。

妻がキッチンドリッカーかもしれないという疑いを抱いたのが三カ月ばかり前で、偶然にわかつたことだった。何かの拍子に、普段なら決して自分では開かない扉をあけたのだ。

調味料の入っている小さな扉で、高見は醤油か酢かを探していたのだった。その時、大小の瓶に並んでウオツカの瓶が眼に入った。最初は料理にでも使うのだろうくらいに思った。けれども、ボトルの四分の三は空だった。高見の胸に疑惑がともった。

気になったので数日後、同じところを覗いてみた。ウオツカのボトルは同じところにあつたが、新しくなっていて、半分ばかり残っていた。更に二日後。ボトルは更に新しく替っていた。ということは、妻は一日に約半ボトルあける計算になる。

そのことを妻に直接質（た）してみようとは、決して考えなかった。自分に原因と責任があるような気がしたからだった。

その後も気をつけて妻を観察しつづけたが、酔っていることをさくらせることも、アルコール臭をプンプンさせていることもなかった。もともとウオツカには匂いはない。

それが、多加子の部屋を訪れる回数が極端に減った理由であった。

高見は、多加子との電話を切ると、煙草を取り出してライターで火をつけてから、電話ボックスを出た。

ウオツカというのはいけない。ウオツカは悪い徴候だ。高見は二度ほど吸っただけの煙草を、指先で弾いて、歩道と車道の間の溝に落した。

妻はもう完全にアルコール依存症なのだろうか？　そしてアルコール依存症は、離婚の理由になるのかどうか？　自分の人生から妻を取り除くとうなるのかと高見はチラッと考えずにはおれなかった。

視界が一瞬バラ色になった。バラ色の中心で、彼は胸の底にめまいを感じた。たとえ一瞬でも、自分の人生から妻を取り除いたことがおそろしくもあり、すさまじいほどに後ろめたかった。

八時に多加子のマンションに行くと、食事はしなないと言っておいたのに、テーブルには二人分の用意が整っていた。

多加子はピンク系のファンデーションをつけていて、ふわふわしたショッキングピンクのニットを着た^{からだ}軀を弾ませるようにして彼を迎えた。

「どっち先にする？」

と彼女は猫のように軀を高見にすりつけながら訊いた。「食事、それともアレ？」
仕事をバリバリこなし、頭もいい知性的な女が、同時にコケティッシュでもあるのはすばらしいことだった。

ふわふわしたセーターごと、彼女を抱き寄せた。肉というより直接骨を感じさせる軀だ。けれども乳房は大きい。瘦せていて乳房の大きい女はエロティックだと高見は思った。

「どっちも今夜はいらなうと言ったら、気を悪くするかい？」

「理由によるわね」男の眼の中を覗きこみながら多加子が答えた。

「そういう気分になれないんだ」

「わたしのせい？」

「むろん違う」

高見は多加子を抱く腕に力を入れ、そしてそっと離れた。妻には触れてやりもしない、と苦

い暖気おくびのような思いが胃から突き上げた。硬い眼、硬い横顔、硬い手、硬いふくらはぎ、そして硬い声。使い果たされ、手入れをされぬまま放り出してある皮革かわの上着のように、カサカサとした妻。人も物と同じで、使い果されるといふことがあるのではないだろうか。頭の中のカオスが濃く煮つまつていく感じと、高見は闘った。

「わかった。話ね。……聞くわよ」

多加子は急にきびきびと立ち働いて、食卓の上を片づけると、椅子を引いて坐り、反対側の席を高見にすすめた。「さあ、話して」

「しばらく、逢わないでとおこうと考えているんだ」

そんなことは考えていなかった。口が勝手に喋ってしまったのだ。高見は両手でこめかみを揉もんだ。

多加子は探るように高見の顔をみつめ、少し考え、それから言った。「いいわよ。わたしはかまわない」

「理由を訊かないのか」

あまりに呆気あつけない反応なので、高見はかえって傷つけられたような気がした。

「理由？ 説明したいの？ そうしたいのなら聞くわ」感情を極力抑えているのが、感じられた。

「もしも」

と高見は口ごもった。「何も説明などしないですむなら、その方が——」彼は女をみつめた。「しばらくの間だけ、眼をつむっていてもらえないだろうか」

「しばらくつて、どれくらい？」

「わからない。二、三カ月……、六カ月」

「それからどうなるの？」

多加子があまりにも冷静なので、高見は自分の声のうっとうしさが嫌だった。

「僕の方の問題が解決し次第……、またここへ来たい。……虫のいい話みたいに聞こえるかもしれないが」

理不尽にも妻に対する怒りで、高見の胸は膨れ上がった。自分が本当に欲しいのは、眼の前にいる女なのであって、絶対にあいつじゃないのだ。いつもいつも一緒にいたいのは多加子なのであって、妻ではない。それなのに俺は——何を言っているのだろう？ あの家には何も無い。眼に見えない荒廃で崩れかかっているあの家には。

「そう、虫のいい話ね、非常に」

多加子が押し殺した声で言った。「あなたは理由を言わない。三カ月後か六カ月後にふらりと戻って来ると言うだけで、何の保証もない——わたしが言うのは主として精神的な支えの問題。

こうしましょう。三カ月後でも六カ月後でも、電話してみても。その時のことにしましょう」

「きみが腹を立てるのは当然だと思う」

高見は手を伸ばして相手の手に触れようとした。寸前に多加子はそれを引っこめた。なぜか高見は見棄てられたような、孤児のような気分がした。

すると彼の中で泣きたいような、叫び出したいような兇暴な感情が突き上げて来た。彼が求めたのは、こういうことではなかった。絶対に。別れたいの多加子ではなく妻の方なのだ。

高見は混乱し、そして絶望した。使い果してしまったような気がしている妻を、見棄てることはできない。怒りで——妻に対する怒り、多加子に対する怒り、自分に対する怒りで、息がつまりそうになった。彼は椅子からいきなり立ち上がると、多加子の手首を掴んで引き寄せた。彼女は抵抗した。

「こういうのは嫌なのよ。わかるでしょ、別れ話の後のこういうのは——」

それにはかまわず、高見はその場で彼女を壁に押しつけた。

しばらく揉みあっている内に、多加子から力が抜けていくのがわかった。彼女はそのまま壁づたいにズルズルと崩れ落ちて、床の上に横たわった。どうにでもしてくれという、そんな感じが全身から露呈していた。

高見は思わず眼を背けて、女の傍に膝を折って坐った。

「悪かった」と彼は呟いた。

「いいのよ」

横たわったままざらざらした声で多加子が答えた。「最初から、こうなることはわかっていたのよ」

「しかし僕たちは、完全に別れるわけじゃない」

「じゃ何なの？」

高見には、適当な言葉がみつからない。しかし妻のことなど、口が裂けても多加子に知らせたくはなかった。

「ほらね」と、多加子は眼を光らせて、上体を起こし、壁に背をあずけた。「あの初めての日から——」と多加子は呟いた。「わたしがあなたを見上げたあの最初の瞬間から、わたしたちはすでに破局に向って歩いて来たのよ」

「そんなことはない」

「いいえそうよ。その証拠に、週三回が二回になり、いつのまにか一回になっていったわ。それが月に一回になるのは、もっと呆気なかった」

「回数の問題じゃないと思うけど」

高見は力なく立ち上がると、先刻の椅子に浅く腰をかけた。多加子は膝を両腕で抱きしめて